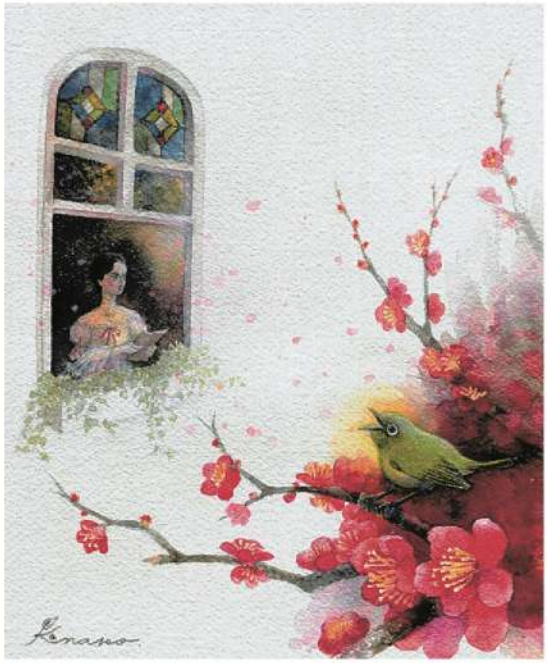
文・小原麻由美
絵・小島加奈子

紅梅のラブレター



鮮やかな黄緑色の羽を持ち、光の春を待ちながら「チーチュルチュル　チーチュルチュル」と愛らしい声で鳴く一羽の小鳥がいました。

森のはずれにある白壁の家に、美しい娘が住んでいました。艶のある黒髪、肌はなめらかに整っていて、うつむくと長いまつ毛の下にスーッと鼻筋が通っています。

小鳥は朝になると、娘の家の庭にある梅の木に隠れるようにしてとまり、娘が窓を開けるのを今か今かと待っていました。

娘は窓辺に立って、いちごのような唇で歌を歌い始めました。透き通る娘の歌声は、森の生き物たちに元気や癒やしや希望を与えてくれました。

小鳥は娘の歌声に合わせて、「チーチュルチュル　チーチュルチュル」と鳴きます。

「とても素敵な歌声ね！」

娘は小鳥の存在に気づき、声をかけました。小鳥の黒目の周りの白い輪が桃色に染まりました。

梅の木に花の蕾が付きました。

小鳥はいつものように梅の木にやってきましたが、今日は娘の姿が見えません。

そんな日が何日も続いたある日、やっと窓が開きました。小鳥が窓辺へ飛んでいくと、娘がベッドの上で横たわっているのが見えました。傍らで娘と話をしている女性もいます。

「お母さん、喉の手術は成功したのに、どうしてこんなにひどい声なの？　私はもう歌を歌えないの？……」

娘のかすれた声に、小鳥は胸が張り裂けそうになりました。

小鳥は娘に会いたくて、毎日窓辺へやってきました。そして「チーチュルチュル　チーチュルチュル」と、懸命に鳴きました。

ある日娘がベッドから体を起こして、小鳥をにらみつけました。

「私は歌が歌えないのに、そんなふうに気持ちよさそうに鳴かないで！」

娘は水の入っているガラスのコップを、床に投げつけました。小鳥は慌てて羽ばたき、森の中へと消えていきました。

月の光も梅香る静かな夜でした。

小鳥は、梅の木に話しかけました。

（またあの子の歌声が聞けるなら、ぼくは何を失っても構わない……）

『きみの想いを梅の花びらに閉じ込めて、娘にそっと伝えておいで』

小鳥が見上げた先には、たった今開いたばかりの紅色の梅の花が見えました。ぷっくりとした花びらが5枚あります。

小鳥は5枚の花びらをくわえて娘の家へ飛んでいきました。そして、窓越しから娘の枕元に寄り添いました。

（大好きだよ）

小鳥は花びらを1枚、窓に貼り付けました。

（元気になってね）

小鳥はまた1枚、花びらを窓に貼り付けました。

（いつも笑顔でいてね）

（とってもきれいだよ）

（またきみの歌を聞かせて……）

小鳥は5枚の梅の花びらすべてに、声にならない想いを込めました。

小鳥が去ったあと、窓がスーッと開きました。窓に張り付いていた花びらが一枚ずつ離れて、クルクルと回りながら水差し瓶の中に吸い込まれていきました。

朝になりました。

「いい香り」

娘はベッドから上半身を起こして、梅鼠色に染まっている水差し瓶の水をコップに注いで、ゆっくりと飲みました。

しばらくすると……。

娘は立ち上がって、背伸びをしました。喉の奥を開いて、息と一緒に思い切って声を出しました。

娘は床に膝をついて、泣き崩れました。

「私また、歌が歌えるわ！」

早春の柔らかな光が窓から降りそそぎ、娘は目を細めながら息を整えました。以前よりも力強く透明感のある歌声が、森中に響き渡りました。

黄緑色の羽を持つ一羽の小鳥が、満開の梅の木の枝にとまり、ただ静かに娘の歌声を聞いています。

小鳥がどんなに喉を震わせても、あの愛らしい鳴き声は、もう決して聞こえることはありませんでした。（おわり）

【文】小原麻由美
1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」（PHP研究所）、「キュンすけのおくりもの」（三恵社）がある。

【絵】小島加奈子
1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。